

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

The Dickens Fellowship of Japan

平成27年度秋季総会 プログラム

Annual General Meeting 2015 — Programme

日時：2015年10月10日（土） Date: 10 October 2015

会場：日本大学 経済学部（東京都千代田区三崎町 1-3-2）

Venue: Nihon University, College of Economics 1-3-2 Misaki-cho, Chiyoda-ku, Tokyo

理事会 Board of Trustees Meeting (13:20 – 13:50)

経済学部7号館 7階7072教室

総会 Annual General Meeting (14:00 – 14:30)

経済学部7号館 2階講堂

(Auditorium, 2nd Floor, Bldg. 7, College of Economics)

第1部 研究発表 Short Paper Session (14:40 – 16:00)

司会： 宮丸裕二（中央大学教授）Yuji MIYAMARU (Chuo University)

1. 熊谷めぐみ（立教大学大学院）Megumi KUMAGAI (Rikkyo University)

「ディケンズ後期小説における独身男性の表象」

The Representation of Bachelors in Dickens's Later Novels

2. 猪熊恵子（東京医科歯科大学准教授）Keiko INOKUMA

(Tokyo Medical and Dental University)

「読み書きの難しさ——*David Copperfield* を読む」

The Difficulty of “I am born”: An Analysis of David's Wonderful Literacy

第2部 講演 Lecture (16:20 – 17:40)

司会： 山本史郎（東京大学教授）Shiro YAMAMOTO (Tokyo University)

講師： 斎藤兆史（東京大学教授）Yoshifumi SAITO (Tokyo University)

「『オリヴァー・トゥイスト』を訳してみた分かったこと」

On Translating *Oliver Twist*

懇親会 (18:00 – 20:00) Convivial Party

会場： 経済学部7号館 14階レセプションルーム

会費： 一般 5,000円 学生 3,000円

研究発表 Papers

ディケンズ後期小説における独身男性の表象

立教大学大学院博士後期課程 熊谷めぐみ

ヴィクトリア朝社会において、独身女性は「余った女」として問題視されたが、一方、独身男性は、彼女たちほど問題視されることはなかった。しかしそれでもなお、彼らの存在が、社会において逸脱した存在であることに違いはなかった。本発表では、*Our Mutual Friend* (1864-65) などの、ディケンズ後期の小説作品に登場する、気ままに独身生活を謳歌することが許されない独身男性キャラクターに着目し、彼らの葛藤を糸口に、作品における独身男性の果たす役割についての考察を試みる。

読み書きの難しさ——*David Copperfield* を読む

東京医科歯科大学准教授 猪熊 恵子

自伝とは一般に、長じた語り手が自らの過去を振り返る回想録形式を取る。しかし、「僕は生まれる (I am born)」という特徴的な現在時制で始まる *David Copperfield* は、自分の誕生の瞬間を、語り手が臨場感をもって語ることで、既存の回想モデルを打破している。また、*David* の読み書き能力の成熟に注目してみると、直線的成長モデルが一度ならず覆されていることに気付く。自分を語る言葉とともにこの世に誕生する神童 *David* は、自らの語りの内部でいったん普通の赤ん坊に逆戻りし、言葉を覚え、文字を学習する。しかしその後も、過剰に舌足らずであったかと思えば、過剰に読み書きに長けた一面を見せる。本発表では、不思議な揺れとともに展開する *David* のリテラシー獲得過程に注目し、そこに見られるねじれや歪みこそ、作品本来のみずみずしい魅力を生み出す大きな要因であることを議論してみたい。

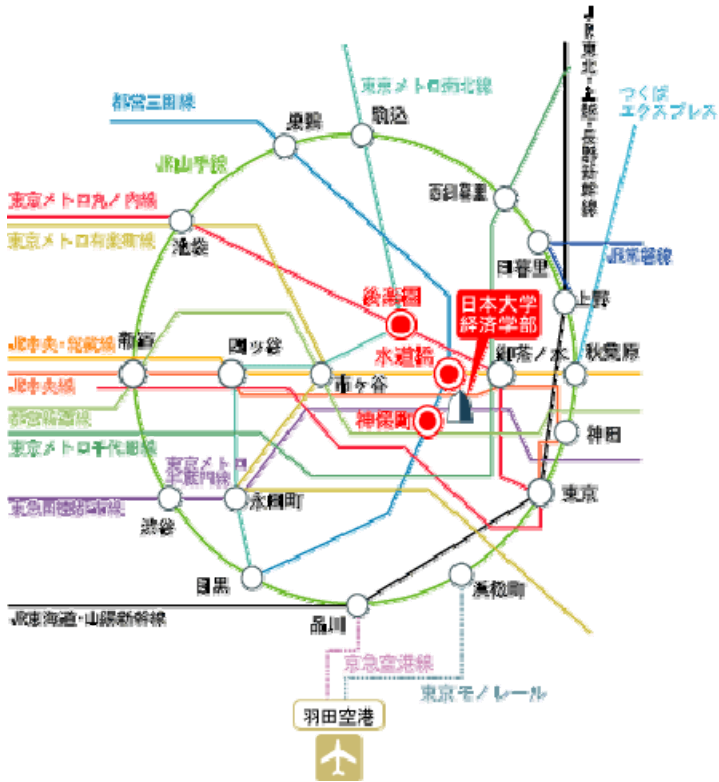
講演 Lecture

『オリヴァー・トゥイスト』を訳してみても分かったこと

東京大学教授 斎藤 兆史

ディケンズは声の魔術師である。彼が絶妙な声の使い分けによって登場人物たちの役回りを差異化し、物語を多角的に描き出すことは、多くの研究者が認めるところであろう。しかしながら、彼が多彩な文体を操る作家であるとの先入観に影響されたとおぼしき過去のディケンズの文体研究に対して、筆者は長らく疑問を抱いてきた。たとえば、山本忠雄は「Jane Austen に次いで Dickens が多く [描出話法を] 用いている」(『チャールズ・ディケンズの文体』、1960年) と論じているが、そこまでディケンズが描出話法(現代の文体論の用語では「自由間接話法」)を多用していたとは思えない。むしろ、ディケンズの語りは「講談」にも近いもので、その語り手は基本的に一声の声色遣いで、自由間接話法のような多声性を有する声を発することはほとんどない、というのが筆者の印象であった。今回、『オリヴァー・トゥイスト』を訳してみても、ある程度までこの印象が正しいことは確認できたが、自由間接話法が現われる場面も少なからず存在することが分かった。この件を含め、本作を訳すことで改めて見えてきたことについて話してみたい。

アクセスマップ



【東京駅からのアクセス】

- JR 総武・中央線「水道橋」駅東口より 徒歩3分
- 都営三田線「水道橋」駅より徒歩3分
- 都営新宿線・都営三田線・東京メトロ半蔵門線「神保町」駅より徒歩5分
- 東京メトロ丸ノ内線・南北線「後樂園」駅 2出口 徒歩13分

【住所】 〒101-8360

東京都千代田区三崎町 1-3-2

Tel. 03-3511-5590

キャンパスマップ



大会会場 (2階講堂)
懇親会 (14階レセプションルーム)